

キリスト教学専修

第二演習・2018年度後期****

A. 予定 (同学年は五十音順)

キリスト教学研究室:

火曜日 4時限目・1人 (+5時限目も可能)

60分の発表+30分の質疑応答

担当者は資料を準備の上、発表。パワーポイント使用可。

予定表・省略

B. 関連するプログラム

1. 研究室紀要の刊行: 3月刊行
 - ・第二演習での発表 → 論文、書評、サーベイ
 - ・特別研究発表会: 年2回、9月初旬と2017年3月中旬
 - ・学会発表の予行+書評・サーベイ
 - ・原則的には: 大学院生全員が参加 (博士後期課程だけでなく)
2. 京都哲学会・公開講演会
 - ・11月3日(土) 午後
 - ・芦名定道「フクシマ以降のキリスト教思想の動向から」
3. 12月1日(土) 午後
 - ・京都大学基督教学会・学術大会

C. その他

(日本宗教学会・第77回学術大会 パネル「キリスト教殉教と歴史的記憶」

2018/9/9)

現代日本における殉教論と歴史的記憶

<内容>

1. 問題
2. キリシタン殉教の記憶、あるいは記憶の抑圧
3. 現代神学と殉教の問題
4. 結び——殉教論の意義

<概要・ポイント>

1. 問題

殉教者(信仰の証人)はキリスト教史において特別な位置を占めている。「殉教の根源は新約聖書の福音書におけるイエスの十字架上の苦難と死である。・・・古代教会がローマ帝国の迫害を受けている間は、多くの殉教者が出た。」。日本においても、キリシタン史は殉教歴史である。しかし、その後、近代以降の日本キリスト教は、殉教しない教会となり現代にいたっている。では、現代キリスト教にとって殉教とは、何か? 以下、キリ

シタン殉教の記憶とその抑圧について簡単に考察し、殉教論の意義について論じてみたい。

1. 殉教とキリスト教の緊密な関係。

「使徒ペトロ」「アンティオキアの主教イグナティオス」「キプリアヌス」
「テルトゥリアヌス」「有名な言葉」「殉教者の血はキリスト者の種子である。」
(佐藤吉昭『キリスト教における殉教研究』創文社、2004年。)

2. しかし、現代日本のキリスト教（あるいは近代以降の）殉教しない教会。

殉教論は不要か？ 殉教論とは

・古屋安雄『日本のキリスト教は本物か？——日本キリスト教史の諸問題』教文館、
2011年。

殉教しない教会／殉教と武士道／殉教と知識人／背教者、棄教者、離教者／棄教者の系譜／迫害と弾圧の論理

「キリスト教と言えば「殉教する宗教」、教会と言えば「殉教する教会」ということになっている。お隣の韓国や中国のキリスト教史には、必ず宣教師や信者の殉教が出てくる。日本のキリスト教史もその初めであるキリシタン史は殉教史である。」「ところが、日本のプロテスタント主流教会は、ホーリネス教会を別として、殉教しない教会である。いや、日本の現代カトリック教会も殉教しない教会ではないか。」

「日本のキリスト教が、カトリックもプロテスタントも殉教しなかったどころか、軍国主義と妥協したこと」

「知識人は殉教しないらしい。少なくとも殉教しにくいらしい。」

3. もちろん、殉教の意義についての議論は存在する。

矢内原忠雄「日本精神への反省」（1955年。『矢内原忠雄全集 第十九巻』岩波書店、1964年）など。

2.キリシタン殉教の記憶、あるいは記憶の抑圧

なぜ、殉教しない教会になったのか。

古屋安雄によれば、キリシタンとの軍事的な衝突の経験は、江戸幕府から明治政府に受け継がれ、太平洋戦争前の弾圧政策に結実する。それは、「迫害すれば、殉教者が出て血が流れる。そして、かえって信仰は強くなる。しかし、弾圧すれば、つまり真綿で絞めるように絞めれば、血は流れることなく、骨抜きにして、棄教者を生むだけですむ」。これが近代以降のキリスト教が殉教しない教会となったことの一因なのである（「迫害のようにハードではなく、ソフトな思想誘導や思想管理」）。

4. 「殉教者が出るためには、もちろん迫害者がいるわけである。」

「島原の乱」「幕府の権威を認めないキリシタンの勢力を恐れた」「それは残虐を極めた迫害であった。いわゆる「転び」という棄教者が生まれるほど」、「多くの殉教者」「明治維新の直前の浦上崩れまで続いた現象」

↓

江戸時代の宗教政策 → 近代日本の宗教状況

キリシタン禁制という江戸幕府の基本方針は、江戸時代の宗教政策（宗門改めと寺請制度。封建社会の秩序の安定化に向けて宗教の民衆化を統制する政策）を規定し、さらには日本人の宗教観に大きな影響を与えるものとなった。

宗門改めと寺請制度：仏教・寺を通じた民衆の管理

転びキリシタンは仏教に帰依したことの証文を要求される。

宗門改帳（宗旨人別帳）：領民の宗旨を登録した帳簿の作成

→ 近世的な「家」を掌握する役割、幕藩領主が把握すべき「小農」を土地に縛り付ける機能。

つまり、宗教と言え、もっぱら家制度に関連した冠婚葬祭に結びつけられ、民衆の宗教的エネルギーはその実現の場を失うことになる（宗教の習俗化・形式化）。「これから学んだのが、明治政府以降の戦前の弾圧政策」「弾圧の論理」「この論理は一朝にしてできたものではなく、試行錯誤を経たものである。」

キリシタンについての歴史的記憶（忘却・抑圧を経た邪教イメージ）

＝キリシタン時代と近世・近代との断絶

5. キリシタン殉教は、日本のキリスト教にとって、特別な仕方で記憶されていない（カトリック教会のかなりの部分でも）。

こうした近世・近代の動向は、日本のキリスト教（カトリック教会も含め）が、キリシタン殉教について、一般の日本人とは異なった特別な仕方で記憶することを不可能にし、いわば殉教の忘却を生じることになる。現代日本のキリスト教徒がキリシタン殉教について有するイメージは、キリスト教信仰に規定されたものというよりも、教科書とメディアによるイメージと考えるのが妥当であろう（半世紀以上も前に武田清子がキリスト者の天皇制について意識について行ったアンケート調査からの類推）。

6. 古屋安雄／大木英夫『日本の神学』ヨルダン社、1989年。

「第七章 天皇制とキリスト教」

「ではなぜ戦前のキリスト者の大多数は、いともたやすく日本「尊厳無比の国体」をもった国家である、という国粹主義を信奉してしまったのであろうか。・・・この問題を理解することなくして「日本の神学」の対象である「日本」を理解することは不可能である。・・・それは一言でいうと天皇制の問題である。」(174)

「武田清子が一九五五年頃におこなったアンケート調査」「武田清子「天皇制とキリスト者の意識」『人間観の相克』、一九五九年」「一四〇名（内男性一〇六名、女性三四名）」(175)

「明治時代より大正を経て今日にいたる近代日本歴史の形成過程と、それぞれの時代に強調された国民教育の方針、及び、一般世論や風潮がキリスト者の天皇制に関する意識の形成に最も重要な役割を果たして来たのではないか」(184)、「教会の影響力が極めて低い」、「あの戦争中に、ほとんどの日本のキリスト者は天皇制を自明のこととして、他の国民と同じく戦争を支持したのであった。」(185)

7. 記憶の抑圧あるいは忘却、それは作用を継続している。教科書とメディアを通して。

キリシタンの殉教は、江戸幕府の宗教政策を通じて、近世・近代の日本人の宗教観を規定している。記憶されざる意識されざる歴史の規定要因。日常的生を規制する公共的場面から、意識のレベルから宗教が抜け落ちる。現代日本の宗教は、もっぱら葬儀・死という場面において登場するものとなっている（日本的な政教分離）。→ 殉教しない教会

3. 現代神学と殉教の問題

では、殉教を論じることは、現代日本のキリスト教思想にとっていかなる意義を有するのだろうか。ここでは、現代日本のプロテスタント思想における「殉教」論として、近藤勝彦「殉教論の再考」（『教会と伝道のために』教文館、1992年）を参照してみよう。近藤は、現代日本における自殺者の数から、自殺が重大な社会問題であるだけでなく、思想的問題また深い宗教問題であることの確認から議論をはじめ、自殺こそが本当に真剣な哲学的問題であるとするアルベール・カミュに対するアブラハム・ヘシエルの反論に注目する。ヘシエルが本当に真剣な問題として挙げるのは殉教の問題である。殉教は、不条理に対して降伏することなく聖なる方がいますと証言し、神のため、神の御名のために死ぬ備えをなす能力の事柄であり、現代における自殺の増加は殉教的生の衰退と無関係ではない。これが近藤の殉教理解であり、それは、一方で、初期キリスト教に遡る殉教理解（ローマ書十四章八節「生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ」）を前提にし、他方で、殉教論をいわゆる迫害のあるなしによらない仕方での一般的な状況に拡張する試みとなる。近藤は、教会史家フォン・カンペンハウゼンの言葉、「困難な試練に耐えつづけている者はだれでも、たとえばその定めを忍耐して耐えている病人も、今日、殉教者と言うことができる」を引用する。こうして、現代の殉教論はいわば宗教的生において普遍化されたものとなるが、しかし、歴史的な迫害下の殉教は、その典型例・模範例としての意味は失ってはいない。こうした現代の殉教論のために、キリシタン殉教を歴史的記憶の忘却から救い出すことは、現代のキリスト教研究の課題となるであろう。

8. 殉教をより一般的な問いに接続すること。

現代日本のプロテスタント思想における「殉教」論

・近藤勝彦「殉教論の再考」（『教会と伝道のために』教文館、1992年）

「一昨年の日本における自殺者の数は、二万五千五二四人であったという」、「今日の一大社会現象であり、重大社会問題だと言わねばならないであろう。」「思想問題であり、また深く宗教問題」

「アブラハム・ヘシエル」「アルベール・カミュによれば、本当に真剣な哲学的問題は、一つしかない。それは、自殺の問題である。しかしわたしは反論したい。本当に真剣な問題は一つしかない。それは殉教の問題である。・・・自殺は逃避であり、不条理に対する降伏である。殉教は悪しき不条理ではなく、聖なる方がいますという証言である。・・・人間の偉大さを示す言葉は、神のため、神の御名のために死ぬ備えをなす能力である。」
「だとすると、現代における自殺の増加は、殉教の喪失、あるいは殉教的生の衰退とうらはらの現象だと言うこともできるであろう。」

「自分のためのみに生きる人生は、一見その逆に見える自分勝手に死ぬことと実は紙一重の差なのである。」「人生は、それ自体、人生以上のものを必要としている。」

「サナトロジーの関連で、もう一度、「殉教論」（わたしはこれをマルトス＝証人、殉教者の学びとして、マルトロジーと呼ぼう。・・・）を再考する必要があるのではないだろうか。」

9. 「ローマ人への手紙一四章七節」「わたしたちのうち、だれひとり自分のために生きる者はなく、だれひとり自分のために死ぬ者はない」、「八節には、「生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ」、「キリスト者の生と死は、こうして主のための生と死に、つまり証人の生と死に、殉教的な生と死にされたのである。」

「殉教の一つの面は、迫害の下に恵みによって起きるという面である。しかし、いわゆる迫害状況のあるなしにかかわらず、「主のもの」として「主のために」生きかつ死ぬという信仰の姿は、常に存在する。そして、人生の試練の中に、いわゆる迫害なき時代のマルトロジーの場がある。・・・常日頃の生き方として、主のものとして、主のために、生きかつ死ぬという人生がある。・・・試練の中でのわれわれの生きる力であろう。」

「教会史家フォン・カンペンハウゼン」「困難な試練に耐えつづけている者はだれでも、たとえばその定めを忍耐して耐えている病人も、今日、殉教者と言うことができる。」
「現代におけるマルトロジー再考」

4. 結び——殉教論の意義

10. 殉教論の普遍化の試み。現代キリスト教にとって、「殉教」の再考。

11. しかし、キリシタン殉教はその特殊な典型例・模範例としての意味は失われない。

キリシタン殉教の再発見は、歴史的記憶（国家）における記憶喪失から宗教的生を救い出す機能を有するのではないか（記憶の考古学と歴史研究）。

キリシタン殉教者の証言を掘り起こすこと＝近代日本の宗教状況の批判的再考
具体的な事例を参照することの必要性。